



「友への便り」

土 屋 健 治

昨年12月初めのころのこと、ひとつの旋律がしきりに街に流れていることに気付いた。インドネシアの多くの歌が、甘くやさしくややものうげな調べを基調とするのにひきかえ、それは、たとえば山川のせせらぎの峡谷にこだまするような、澄明なひびきを伝えていた。年末のある日、私は耳になじんだ一節をそっと口にして市場でカセットテープを買い求めた。そして、そのメロディーが、Ebiet G. Adeの*Camellia II*というアルバムの最初におさめられている“Berita Kepada Kawan”（「友への便り」）であることを教えられた。私はその後、柄にもなく新聞や雑誌の「歌謡曲情報」にまで目を通すようになった。

エビートということし25歳の一青年が、1979年6月にジョクジャカルタ市で作詞作曲し、みずからギターを奏でて吹き込んだ「友への便り」は、ジャカルタの歌謡曲（POP）市場に彗星のように登場し、昨年末からことし初めにかけてインドネシアの歌謡界を席卷した歌であった。それは、昨年12月からことし2月までの3カ月間、「歌謡曲ベスト20」の「王座」を維持したという。

この間、エビートと彼の歌をめぐる記事がしばしば紙面を賑わし、週刊誌『テンポ』は特集記事を組む（3月8日号）ほどであったから、彼の歌の出現とその受け入れられ方はたんなる音楽ニュースをこえた社会的意味をもつものとして了解されているといえよう。

エビートの曲は「友への便り」に限らずいずれもさわやかに澄んでいる。『テンポ』誌はこれを「リリズムの再生」であると述べているが、いかにも私のところを先ずとらえたのもこの透明度の高い音色であった。とはいえ、1955年に中ジャワのパンジャルネガラに生れた詩作とギターを愛するこの青年が、「私はひとびとに詩を伝えたい。メロディーを付したのは私の詩を読んでほしいか

らにほかならない」というとき、「友への便り」は文字通りひとつのメッセージ（便り）であることに気付く。「異邦人」である私と異なって、ここではエビートの旋律は歌詞と一つになっている。

それはおおよそ次のような情景であろうか。

草の萎え石くれのにぶくひかるあれ野に、泣きぬれて牛を追う子供がいる。遠い昔に両親を天変地異でなくしたという。このくにの何故にわざわざの多かりしやと問えど、天地寂寥として、餅はかえらない。それは、神がわれらの所業を厭い、自然がわれらを疎むことのしるしなのか。

友よ、旅の便りを伝えます、と歌い出されるこの詩は、光と色彩にみちたつねのインドネシアのイメージとはまた別の世界を伝えている。それは花の咲き音楽の奏でられる世界とは別の、あれ野に風のしょうしょうと吹き渡る世界である。そこでは、風景は漂白されている。

私は教室で、エビートのメッセージがこの国の津々浦々で共感をえた理由を尋ねたことがある。「とにかく良い。こころが洗われるようだ」という学生の答えは、それ以上のことを知ろう（「分析」しよう）とする私を突き放す強さがあった。だから、「地にわざわざの充ちるとき……」という「ジョヨボヨの予言」をこの歌に重ね合わせても、せん無いことなのであろう。

とはいえ、「友への便り」にみられるのは、「自然」を「自我」と相渉るものとして観照しそれをたかい抒情性で表現するという、かつて80年前にカルティニが示したのと同質の感性であるように私には思われる。その凛冽の抒情がひとのこころをうつ。

あるいは、カルティニとともにエビートもまた、ontwikkelingの時代のたぐいまれな証人なのかもしれない。（1980年3月10日記・ジャカルタで）（京都大学東南アジア研究センター助教授）

マルタバン発ラングーン行き急行列車

田 中 耕 司

マルタバン（ビルマ名ではモッタマ）はサルウィン川の河口をはさんでモールメンと向かい合うモン州（以前のテナセリム管区）の小さな町である。ラングーンからモールメンへ、あるいはさらにモン州南部へと出かける人は、汽車にしる自動車にしる、いったんここで乗りものを捨て、サルウィン川を渡るフェリーボートに乗りかえねばならない。1979年1月から40日ばかり滞在したビルマでの調査のあい間に、モールメンを訪ねたわたしたちは、往路と同じく汽車でラングーンへ戻るべく、マルタバンへ渡るフェリーボートに乗りこんだ。

マルタバンの船着場から駅まではほんのわずかししか離れていない。駅周辺や構内はラングーンへ向かう人たちでごった返しており、たいへんな混雑をみせている。切符を入手するのに手間どるのはどこの駅でも同じだが、この駅ではよほど利用者が多いとみえてなかなか切符が手に入らない。ビルマ政府のお墨付きをみせてもなかなか融通してくれないので、ともかく切符売場周辺で順番を待つことにした。

おそらくわたしたちと同じ列車に乗ろうとしているのだろうか、たくさんの人々が右往左往しているのを眺めているうちに、奇妙なことに気がついた。この駅に入ってくる女たちは、老いも若きも、子供までがまるで妊婦のように大きなお腹でいかにもゆったり歩いているのである。それにしてもお腹の大きい人が多すぎる。奇妙だなと思っていたら、切符売場の雑踏のなかでひとりの女がロンジーを脱ぎはじめたのである。通常ビルマの女性はこの下には何も身につけていないといわれる。しかし、驚くなかれ、そのロンジーの下からさらに別のロンジーが現れたのである。おそらくその下にはさらに別のロンジーが隠されているのだろう。妊婦が多いと思ったのは間違いで、ロンジーを幾重にも巻きつけた女が多かったのである。彼女たちが、モールメンで手に入れた布や衣類

を身に巻きつけて運ぶ、ヤミ屋だと気がつくまでにはそれほど時間を要しなかった。駅周辺だけでなく、構内に入ってもヤミ物資の交換がひんぱんに行われていたからである。なかには、化学調味料の入ったポリ袋をひもで内股に巻きつけているヤミ屋もいた。これでは悠然と歩かないわけにはいかないはずだ。

モン州はタイ国と国境を接した南北に細長い州である。そのため、モールメンにはタイ国から流入する密輸品が集中し、それを目あてにラングーンから多勢のヤミ屋がここに集まってくる。私たちの乗ろうとする列車は、モールメンからラングーンへヤミ物資を運ぶ、いわば大動脈だったのである。切符を手に入れ、弁当を買いこんで列車に乗りこむと、先に乗りこんだ女たちはもう何事もなかったかのように、ヤミ物資をからだからはずし、荷物棚や通路に積みあげている。あとはラングーンに着くのを待つだけである。

午後3時前にマルタバン駅を発った列車は、9時前にラングーンの北郊にさしかかった。ヤミ屋が荷物をまとめはじめると、車内は再び賑やかになってきた。そのとき、まるで申し合わせたかのように列車が減速しはじめると、ヤミ屋は荷物を窓から抛りはじめたではないか。沿線には仲間が待機していて荷物を受け取っている。なるほど、こうすればヤミ物資を無事にラングーン市内に持ちこめるわけである。15分ほど減速していた列車は再び加速しはじめ、9時半にラングーン駅に滑りこんでいった。

4年前の訪問時にくらべ、ラングーン市内では消費物資が格段に豊富になっていた。ブラックマーケットもますます賑わっているようだ。モールメンからこうして運ばれてきた商品も店頭を飾っていることだろう。この汽車の旅は、ビルマ式社会主義と民衆のしたたかな生活力との奇妙な混在をみる格好の機会だったように思う。（京都大学東南アジア研究センター助手）